

弾力

栗の実が落ちる。ポンと音を立てて、地を打って跳ね反って。栗の実は割れる。いがを破って梢に跳ねて。草の実が飛ぶ。莢を裂いて、空を切つて。みんな自分の力、余る力である。みのは、秋の木の実は、草の実では、強い弾力の持主であることである。秋の野も山も、この弾力の小粒の持主で、かちんかちん張り切っている。

幼児が駈けて来てぶつかると、コツンと音でもしそうだ。そして自分で跳ね返つて飛んでゆく。幼児達互いの間に、言葉が跳ね返る。目がぶつかる。肩がぶつかる。争いじゃない。戦いじゃない。勿論悪意の反発ではない。ただ弾力なのだ。弾力と弾力との快い、怡しい触れ方なのだ。幼稚園は今、この弾力のかわいらしい持主でびんびん張り切っている。見ていてびっくりにさせられる程に。こっちまでおのずと弾力的にさせられる程に。